

# 花業界は戦国時代

チェンマイ・セトコンフローラ代表

齊藤 正二

花葉会の編集子からタイの園芸事情について所感をとの要請を受けました。さて引き受けたはいいけれど筆？キーボードは全く進まない。おまけにPC CrashでExcelも開かない。困った。そこで大上段に私が日ごろしていることや考えている事を、ほとんど脈絡もなしに、書きます。読者諸氏に少しでも参考になれば幸いです。

以下はかつて2002年千葉県の NewFarmer Chiba に書いたものです。未だに色あせていません。それを再掲します。

## 花ゲリラ

私の仕事は球根や花苗を国内種苗業者へ供給することです。かれこれ30年続いています。タネ屋にタネ（ネタ）を売るので、いつもタネ屋の欲しがるものを用意するのが至上命令です。そんなわけで、いつも新しいネタ（遺伝子）を求めて海外のナーセリーや山野を駆け巡っているわけです。

この30年間で、花の世界も大変に様変わりしました。稽古花と慶弔花の時代が長く続き、国民の生活水準の向上と共に花の消費もずっと右肩上がりであり、稽古花はフラワーアレンジメントと名前が変わり、慶弔花はブライダルやギフトなどと名を変え、花が生活に密着して使われるようになりました。そして最近のガーデニングブームです。花は確実にその地歩を得たように思われます。

この間、市場に出回る花の種類も確実に増えつづけ、市場筋からの情報によれば、最近では新たにデビューする花は一年に数百種にのぼると言われており、まさに植物の導入や改良はいま戦国時代の様相です。私もこの間、いろいろ海外からの導入や自身での改良品種など市場に投入してきました。そのいくつかはヒットし、当初全くマイナーであったものが、今ではメジャー商品になったものが数多くあります。

思いきった発想の転換と、売れなくてもめげずに、惚れ込んだ花を何とかして世に出したいという情熱でここまでやってきました。ある人は私を「花ゲリラ」

と呼びました。思わぬ方角から突然切りこんでくるから・・・ということらしいです。たしかにそういう部分がありますが、ゲリラはやみくもでは出来ません。周到な準備と仕掛けが必要です。

昨今の不況下、ついに花も前代未聞の右肩下がりやを味わっています。こんな時こそ、また「花ゲリラ」が要求されていると思っています。

## ますます国際化する花ビジネス

かつて日本は世界に誇る球根輸出国でした。私は大学卒業後、横浜のとある球根輸出会社へ就職し、ユリ、チューリップ、スイセン、椿、芍薬などをアメリカ、ヨーロッパへ輸出していました。1ドル360円時代です。それがいまや逆に世界でも有数の球根輸入国になってしまいました。1ドル120円時代です。ユリは日本、中国が原産国ですが、いまやカサブランカに代表されるように、欧米で改良された日本産のユリ球根が洪水のように日本市場に溢れる時代になってしまい、この世界の歴史を知るものにとって、隔世の感ありです。

切花はどうでしょう。切花は鮮度が命です。円高と生鮮輸送技術の進歩でいまや地球の裏側、南米コロンビアやチリからさえ、切花が輸入されるようになりました。かつてアメリカの切花産業は中南米の新興切花産地に押され、壊滅的打撃を受けました。マイアミやニューヨークは、アメリカの切花産地カリフォルニアよりもコロンビアのほうが地理的に近く、豊富で安価な労働力の得られるコロンビアに太刀打ち出来なかったからです。

最近でこそ円安と不況で切花輸入は低迷が続けていますが、中国、韓国、そしてインドネシア、ベトナムなどで日本市場向けの切花産地の形成が急ピッチで進んでいます。日本の景気が持ち直し、円がまた高くなれば、これらの新興産地からの輸出攻勢に、日本の切花生産者が晒されるようになるのは目に見えています。隣百姓から産地間競争、そしていま国際間競争の時代へまっしぐらに進んでいます。日本だけで物事を考え

る時代は終わりました。

現在は不確実性の時代と言われます。昨今は円安です。国際間競争は確実に進んでいます。東南アジアのハブであるタイBKKに大田花きが進出するのも時代の流れです。

球根ビジネスもまた大きな曲がり角に立っています。非関税障壁と言われた輸入植物の隔離規制が多くの品目で撤廃され、グラジオラス、ユリ、チューリップなど、安いオランダ産が流入、既存の球根産地はたちどころに壊滅状態。私自身も多くの品目の生産を諦めざるを得ない状態に追いやられています。この後、円がものすごく安くなり輸入のコストが高くなるような、万にひとつの機会でもなければ日本での球根生産は再興しないでしょう。

## 海外との連携

こんな状況の中、私は10年ほどまえから、タイに新天地を求め日本向けの球根の開発と生産に取り組み、オランダとバッティングしない品目で勝負に出ました。いままでにないラインナップで一時はたいそう順調でしたが、最近の不況は私達のビジネススタイルをも変えつつあります。私の知る限りでも、大勢の日本人生産者がタイ、中国、インドネシア、マレーシアなどで百姓を始めています。かつて私が、「日本だけで百姓するのではなく、海外でやったら」などと冗談を飛ばしていましたが、それはいま現実となり、今後一層海外との連携が深まるでしょうし、深まらなければならぬと考えています。

私は今75歳 以上の原稿で30年前ですので40年前のことですね。

## 花業界は戦国時代

筆者が花の仕事についてからの約36年間の花業界の変遷を概観した。改めて36年間というと、「なんと長い間生きてきたんだろう」と感無量なものがあります。私は日米開戦の年、1941年生まれ。戦後の何もない日本で小学一年生になりました。その時既に花を栽培していました。花は人生そのものであり、戦後の花の歴史の語り部世代ということになる。

## 焼け野原でも人は花を求める

筆者が、横浜の会社を辞め、今でいう脱サラ（昔の言葉になった）して花つくりになったころは、今のよう



USA 向けに当社から輸出される *Euphorbia lactea*



タイではよくあるピー（地の神様）を祀る塔



2000年ごろタイで作った自作の庭

いう時代ではありません。私は荷を担いで煙の出る汽車に乗り、千葉港にあった花久という花市場に通っていました。なんともんびりした時代でした。そのうち車という便利なものが出来て、東京まで運ぶようになりました。今の大田市場の前身である芝生花市場に通うようになりました。

ここの先代社長は従業員より先に市場に来ていて（朝4時です） 会うとよく話してくれました。「みんな飢えていた。私も飢えていた。何も売るのが無い。庭先に咲いていた花をかき集め、売りに立った。人々はそれを求めた。その時思った。人は焼け野原でも花を求める。辛いからこそ花を求める。花の仕事をやろう」と。

これは今でも鮮烈に思い出される、なおかつ私を突き動かしている原点そのものであるように思われます。

## 花はメッセンジャーか？

朝鮮戦争特需、オリンピック景気と日本は確実に経済成長路線を突っ走るようになりました。それに合わせて花の流通も便利になり、大量生産大量消費の時代がやってきました。物価も確実に上昇し、世界第2位の経済大国になりました。

ところで花づくりをする人たちは今、幸せだろうか？ 昨今の不況の中で「働けど働けど・・・じっと手を見る」の心境ではないだろうか？

花の売り場に行ってみる。全部とは言わないが、なんと花が粗末に扱われていることか！ 花は花ではなく、金儲けの商売ものになってしまったようです。花のいのちや価値などは二の次で売れるか売れないか、稼ぎがあるかないか、が店頭での価値になってしまったようです。

「花はこころの食べものです」なんて私はあちこちで語ってきましたが、昨今、花は量販店の金儲けの道具です。嬉しいにつけ、悲しいにつけ人は花に思いを託し、贈ったり贈られたり、買って庭に植えたり、花瓶に挿したり・・・なんてセンチメンタリズムの極点と罵られそうです。

それでも筆者は「花はこころを動かし、こころを運ぶメッセンジャー」だと言いつづけます。

花はまだその役目を終わっていない。

## いい時代が来る？

最近、遠隔大量流通から地場流通への流れが加速しています。筆者の住む地域で最近、CDや本を売っていたチェーン店がこの商売をやめて地域の農家、業者に売り場を貸し、生産者名を明記して売る、という新商売を始め、なかなかの評判です。面白い商品も並び、新鮮でしかも安い。なにせ中間マージンは、店の販売手数料だけだから。何故かいまでもある地方の朝市みたい。ないし、筆者が根拠地にしているタイの市場（タラート）みたい。昔返り！？

こんな状況を見ると何故かいい時代が来るような予感がします。



北タイは熱帯サバンナに属し、ため池農業です。当社のため池



タイから球根の輸出積み込み風景です。



日本からカラジウム導入 栽培圃場の一部

## 安く作れるところが適地か？

日本の円高と労賃高騰、自然災害による生鮮野菜価格の乱高下など、いろいろな事情で最近中国からの野菜の開発輸入が話題をよんでいます。これらは農民の発想ではなく、ほとんど商社の手になるもので、彼ら

の利益のための仕事である。



クルクマ新品種 Laddrwean の花壇

### 農民なら平和的適地適作ができる。

最近の日本の花市場は悲惨であることは前に記しました。洋蘭は特にひどい。多くの洋蘭は、その生産に長い年月と高温が必要で、日本での生産コストは当然高く、昨今の市場価格では成立しにくくなってきました。

昨今、これらを解決すべく、日本の蘭農民が東南アジアに生産拠点を動かす動きが目立ち始めました。タイ政府は外国人が農地を買ったり、農業を営むことを禁止しています。当然現地農民との平和的連携がなければことは運べません。

タイは多くの洋蘭の原産地であり、自然条件での適作地です。温度は十分にあり、日本での生産よりも早く開花サイズに達します。日本で生産するよりも、時間、エネルギーとも節約でき、なおかつ豊富で安く、器用な労働力が利用できます。日本農民は、省エネ、省マネーができ、タイ農民は仕事ができ、マネーも入る。両者の利害は一致する。

これは交通通信手段が、十分に発達した時代だからこそ可能になったのであり、文明の発達、交流のさらなる発展にも貢献できる、すばらしい事だと思います。この動きは、今後さらに加速するでしょう。どちらかが利益を得て、どちらかが泣く、または両者が泣くような仕事は本当の適地適作ではない。農民の発想なら、農民どうしなら、お互いの立場も理解しあえ、平和的適地適作、平和共存が出来ると思う。商社の介入を許せば相互信頼が壊れるケースが見られます。本当に理解してくれる商社がサポートしてくれるなら、物流に詳しくない農民には商社も頼りになる存在となります。

### 日本農民よ、世界をめざせ

海外で、大きく農業を営んでいる日本人は枚挙にいとまがない。アメリカでもブラジルでも。特に花卉園芸では、オランダ人と日本人です。タイではオランダ人、カナダ人、イギリス人など白人系が多く、まだ日本人は少数派です。彼らはここでヤシ、観葉植物、果実などを生産し、本国へ送ります。寒い国々なので彼らの本国農民との摩擦はありません。最近、オランダでの環境規制の強化を嫌って海外へ出るオランダ人が増えているようです。

隣百姓から産地間競争へ、国際間競争から国際協調へと、多くの難題を解決しながら時代は確実に動いています。台湾資本も韓国資本もどんどんベトナムやタイに動いています。大資本に攪乱される前に、日本農民よ、世界へ。

今や中国ですね。